

つて行くより外はなかつた。夜分は通行するものもない、黒い水の下のやうな町筋の、雨の揚句のじくじくした上を、來がけから前緒が切れさうな足駄を不愉快に刻みながら、もしも相手が此相談を聞き入れてくれないとなつたら何うなるものだらうと考へると、今から算段に窮し詰るやうな、心細い氣持が湧き上つて來る。さうなると差當り相續税を出すのからが工面が附かない。此間から自分が大分餘計な事に使つたりしたから、家の小使だつても、來月になると、そろ／＼亡くなつて了ひかけるだらう。——こんな事を考へ出すと浮か／＼してはゐられないやうな、不安心な心持が迫つて來る。十吉は何だか一人て黒い嘲りの中に見捨てられて、當てもなく歩いてゐてもするやうにとぼ／＼と歸つて行くのであつた。

かういふ心持の續きには、何となく自分のこれまでの何かの非行を責め悔いるやうな氣分に突つ突かれる。外の事も何だけれども、第一小母や祖母に對して、もつと情を持つてやらなければ間違つてゐるやうに氣が咎める。もう少し同情さへ持つて對したらあゝしてがじく／＼痲癩に障る事も減じるかもしれない。

十吉はかうしたやうな事を次々に考へながら、店の燈火の並んだ町筋から、再び暗い裏

通りに入りつゝ、どういふ續きからか、いつしか、自分が祖母の情合の中に、何の不満もなく、秋の日向に包まれたやうな穏かなライフを引いてゐた時代を物悲しく考へ返して、万千子との早い戀などを跡附けて行くのであつた。さうした頃の事を思ふと、万千子はいつまでも自分と剣がし分つ事の出來ない、自分の半面のやうに戀しい。十吉は今宵祖母に對する反感から、万千子に非度く當つて出て來たのであつた。万千子は何を言つても女らしく口をつぐんで、自分の非を謝罪するやうにしてゐた。十吉はたゞ行きが／＼りてつけ／＼言つたゞけて、本心には何れ程も悪んではゐないのだけれど、万千子は倚る處もない心持に沈んだやうにして薄暗く泣いてゐた。そんなに自分が彼女を疎んじてゐるやうに取つてくれば寂しい。自分はやつぱり万千子に戀ひてゐるのだ。万千子が、もう自分には戀する資格のないものゝやうな、自分に對して求める心を閉ぢてゐるやうな態度になつてゐるのが物足りない。何故にいつか膝に取り附いて泣き入つたやうな心持の續きにはならないのだらう。

十吉は家の戸口を這入つた。万千子はどんなにしてゐるだらう。十吉は灯のない上り口の障子を開けて暗がりへ上つた。どうしたのか次の間にも灯影がないやうである。

と、万千子が唐紙の内から出て来て、
「十さんですか。お歸りなさい。今灯を點しますすけのい。」と言ひつゝ、燐寸を取りに入
るらし。

「もう皆な寝たのですかい？」

「いゝえ、たつた今床へ入つたばかりですのい。」と、濟まなかつたやうに言つて、洋燈を
附ける。あんなにして出たのだつたから、今夜も遅くてなくては歸つて來ないのだらうと
思つて寝かけたものらしかつた。

「まああなた寒かつたてしやう？」と、まぶしさうな目許をして、洋燈臺を座敷へ持つて
行く万千子は、寢床から出たなりの姿である。

「唯今いゝ火を持つてまゐりますすけ。」と言つて、そのまゝ次の間の方へ立つて行く。十
吉は、何故か小母たちが目を開けないやうに、何かを窺つとしてくれ、ばいゝやうな心持
がする。

万千子は寢間着の上に、間に合せて羽織を着て、火鉢を此方へ抱へて來た。

「もうこれから直ぐにお寝みなすのですか。」と火を掻き探して、

「寢間着はあちらの炬燵にかけてありますのい。」と言ひつゝ、炭籠を取つて火鉢に炭を
繼ぐ。

「何時でしやう。まだ早いね今晚は。」と、十吉は、何をか言ひ出したいやうなそわ／＼
する心持を押へつゝ、間の悪いのを隠すやうにかう言つた。

「えい、まだいつもならちやんとしてゐる時刻ですのい。」と、万千子は直ぐにあちらへ
行かうとするでもなく、何をか今迄一人考へ續けてゐた後のやうな目許をして、洋燈の
油のじん／＼いふを見守つたが、間もなく氣附いたやうに自分に返つて、

「十さん、あの、チョコレートでも召し上りませんか。長火鉢にお湯がよくたぎつてゐ
ますすけ。」と、十吉を見る目を約ましく外らした。

「ては一すいと待つて下さいな。わたしこんな風をしてゐますすけ。」と、再び向うへ行く
のである。其實そんなものはどうでもいゝ。それよりも、自分の、何事をか言ひ出したい
やうな此心持の前に、もう一度自分を戀ひ受ける、昔の日のやうな隔りのない女に返つて、
此味意深いやうな氣のする灯影の中に溶け入りつゝ話して欲しい。——
十吉は何となく、万千子の冬のやうに鎖した心の、冷めたい手觸りが飽き足りない。ど

うして自分のかういふ四月の日の隠れを追ひ求めるやうな心持が万千子の胸には通はないのだらうか。かう思ひつゝ十吉は、つれない女を待つやうに、洋燈の明りを浴びた、硝子戸のカーテンの白い色を、底淋しいムードの中に見入りつゝ、求めて與へられないやうな自分の疲れた心の蔭を考へた。

その内に万千子は、揺れこぼれさうなチヨコレートを盆に載せて来るやうな氣勢をして這入つて来る。その方を見返らうとはしらずに、やつぱり一つ處を見續けてゐた十吉は、「持つてまゐりましたい。」と、いふのを聞いて万千子が来たのに氣附いたやうな振りをして、そちらを向いた。

「万千さん、一つだけしか持つて来ないの？お前さんののは？」

「わたしは澤山ですわ。——もうミルクがお了ひでしたけ、甘さがどうですか。」

万千子はあちらに行つた間に寝間着の上に晝の帯を巻いてゐる。十吉は黙つてチヨコレートのコップを取つて、

「ね、万千さん。」と、その儘それを机の角に置いたが、何を言はうとしたのか、自分にも別らなくなつた。

「何ですの？」と、万千子は、十吉の言つた事が聞えなかつたやうに、居すまひを直しつゝ、十吉の下目にした睫を見た。十吉は小母が先刻から目を開けてゐて、二人がいつまで何をしてゐるのかと怪しみはしまいかといふやうに氣が咎めるのであつた。

「小母さんは寝てゐるの？」と、業と聞えれば聞えるやうに言つた。

「いゝえ、先刻からよく寝入つてゐなさいませ。何だか後ろがすう／＼するやうですぞのい。」と、万千子は何の氣もなく常のやうにさう言つて、後ろの唐紙を閉じた。十吉はそれが自分の物欲しい心の裏を搔かれてもするやうな、落ち附かない心持を與へるのであつた。

三十八

その翌る日は、午からになつても夜中からの雨が矢つ張りじと／＼と降り續けた。

十吉は今日は病院へも行きたくない。家のものたちと接觸するのも厭である。終日ちつとからして刑罰に押し込められたやうに、薄暗い此二階に閉ぢ籠つてゐたい。

屋根に浸みる雨の足の中に、何處か倉の處で、もあるらしい、雨樋を落ちる雨水のちら

くといふのが、已に古りた自分の暗い昔から聞はつて来る、名を忘れた人の私語のやうに耳に入る。十吉は置炬燵に寝そべつて、雨の日の蔭りに淀んだ障子の紙をしめやかに見守りつゝ、いつしか、またさつきに續く不愉快な心持に責められてゐた。自分が悪い。自分が誤つた。十吉はもう忘れ諦めようとしてゐる女を、昨夜再び誘惑に落した自分の罪惡が悔いられる。

「十さんそれだけは許して下さい。わたしはもう何んにも忘れて了はなければならぬのですすけ。」

さう言はないばかりに、いつまでも冬の蔭のやうに目を伏せてゐた万千子は、自分の黙した示命にすら抵抗する事の出来ない、薄暗く囚はれた犠牲のやうに、自分の晝の着物を涙ぐみながら片附けて、蔭にのみ生きて来た女の如くに、自分の抱擁に入つた心持を考へると、あゝした敗北した女を自分のエゴイステイックな欲求の下に弄玩したやうな氣がして不愉快である。自身の運命を自覺してゐる万千子に取つては、此出来事は、最早、これまで忘れ盡す事の出来なかつた戀の回復ではなくて、かうした上で永久に捨てられるがため心悲しい告別であつた。――

欠

欠

十吉はかうして目を閉ぢたなりに、寝るともなく剝げたやうな眠りに入つた。

不圖目が開いて見ると、室内はいつの間にかとつぷりと暗くなつてゐる。十吉はこんなになるまで寝入つてゐたのだつたかと氣附きつゝ、眠りの續きから引いて來たやうに自分を包んだ、原因もなく不愉快なさゝくれたムードを見入つた。何だかいろんな事がくさくさ氣になるやうな、剝げ挫けた寂しさが、暗がりの中から浸み入つて來る。何が此やうに氣になるのだから自分にも別らない儘に不安な心持を見るのである。

外には矢つぱり雨がしとくと降り續いてゐる。だれかどかうして蒲團を着せといて下りた後は、こんなに暗くなつても顧みるものもないやうに、灯も附けてはくれない。さう思ふと十吉は何となく痲痺りな物足りない心持になつて、蒲團の襟を折り返して、起き出ようとしかけると、

「お目がさめましたか。」と、ぢつと待つてゐてもしたやうに言ひつゝ、万千子が枕元の暗がりに坐つてゐた。

「よくお寝みなしたのい。さつきから何度起してもお起きなさらないのですのい。もう灯を點してもいゝでしやう？」

「いゝ處ぢやないよ。」と、十吉は、不平を押へるやうに軽くさう言つた。こんな處に灯もなしに坐つてゐて、小母が變に思ひはしまいかといふ氣がして不愉快である。万千子は、「それでは矢つぱりさつきのは夢の中で仰しやつたのでしやうぞのい？」と言ひつゝ、立つて下へ行かうとする。

「何が？」

「ほゝ、自分にもお知りなさらないのですわのい。」と、再び坐つて、

「夕方にわたしが灯を持つて來て、寝てゐらつしやるのを起しましたら、あなたは目を開けなして、灯などを點すのぢやない。消して下へ持つて行けと言つてつけ／＼お叱りなしたのですのい。」

「私が？」

「えい。」と、万千子は寂しく笑つて、

「さうしてお前も暗い中に坐つてゐよと言ひなして、すぐまたすやく／＼お寝みなすのでしやう？私に變だとは思ひましたれど、本當にさう仰しやつたのですけ、灯を消して暫く坐つてゐましたのい。」

「ずつと今まで？」

「いゝえ、しばらくして下りてお祖母さんのお世話や何かしてゐました。」

「灯を消して下へ持つて行けつてわたしが言つたの？」

「えい。」

「可笑しいね。寢言だつたのだらうか。」と、十吉は女の機嫌を取るやうな心持になつてかう言つた。

「さうでしやうぞのい。」と、万千子は物淋しい鬢の後れ毛を搔き上げる。十吉はかうして一緒に暗がり沈んでゐる此女を、自分は最早長く領有する事は出来ないのかと、一人外の事を考へた。

「それから、あの、ささ程のい。」と万千子は氣を換へて、

「だれですか、五十恰好の知らない人がひよつくり來ましてのい、樋口さんの方から御話がありましたから、丁度通りがかりですから一寸此邊を見せて戴きたいのですかとさう言つて、傘をつぼめてずん／＼倉の方へ行つたり、此處の庭を覗いたりして、その儘何んにも言はないでたゞお時儀をして歸つて行つたのですけど、あなた此家を賣らうといふ事

ても仰しやつたのですの？」と十吉の氣に逆らはぬやうに聞かうとするのであつた。

「なんでも、さういふ事の世話をする人のやうてしたけ。」

「さう。」と、十吉はたゞそれだけ言つて黙つてゐたが、

「その事で小母が何とかいづく言つてゐやしないか。」と、さういふのを見た、家のものゝ危惧の容子を想像した。

「小母さんは丁度お留守てしたのい。その人が来るのと入ちちがひに出かけなした跡ですの。」

「あれだ……私は樋口と相談して、これからの考へを附かけてゐるんだ。面倒だからまだ小母なんかには何んにも話さないてゐるんだが、いろんな點から考へて、どうしても此處を賣らなければならぬいよ。またよつく皆んなに納得が行くやうに話す積りだけれど、當分まあ黙つてゐて下さいよのい。お祖母さんたちがごたゝ何んとか言ふのが五月蠅いから。」

かう言つて十吉は、此家を賣り拂つて、倉のものなどを叩き賣るのに祖母たちを説伏せる面倒な厄介を考へた。

「さうすると、いつ頃此家を退きなす都合になるのでしやう。」と、万千子はまだ話が纏つてゐる事のやうに聞くのである。

「それはまだ別らんけど。」と言ひつゝ、十吉は暗がりの障子の硝子を通して、闇の夜の雨の中にたつた一つ寂しく見えてゐる、土手の向うの測候所の窓の灯影を見守つた。何だかかうして暗い中にゐる二人の運命が、あの、昔から毎晩あしこに一つ目叩く古い灯影の物哀れな放射の中に讀まれるやうな心持がする、万千子も何か考へ入つたやうに、黙つて、暗がりに漬つてゐた。稍あつて、

「あなたは此處を賣つて了つて、お祖母さんや小母さんを伴つて此土地を離れて了ひなすお積りなのてしやう？」

「どうしてさういふのい？」

「なぜでも。——此間からさうぢやないかといふ氣がしてゐますのい。」

「どうして？」

「どうしてといふ事もありますけれど、わたしは一體少さい時分から、何といふ事もなく不圖先々の事をかうくだと一人て極めて了つて、きつとさうなるものゝやうな氣が

してならない癖がありますのよ。」

「さう言へば、昔よくそんな事を言つてゐたやうだね。」

「ええ。わたしはお祖母さんに、もし十さんが東京へても一緒に越して行かうとお言ひなしたら、あなたには直ぐ附いてお出でなすかと言つて、何とお言ひなすか、お倉の中で冗談に聞いて見ましたのよ。さうしたらお祖母さんは、十さんの側にゐさせてくれれば、これでもまだ、目は見えないでも、探りく何かしてやらうと言つて、喜んでさうお言ひなすのですのよ。お祖母さんはあゝしてつひいつもあなたに癪を起させてばかりゐなされるやうですけど、矢つぱり小さい時分からのお祖母さんですけ、私たちの心持なども、他の人には別らない事でも、ちやんと解つてゐて下さる事がありますのよ。」と、万千子はしんみりといふ。

「此間はこのよ、ひよつくりお倉から出て來なして、万千やこれをお前にやらう、讀んだら焼いて了まふのぞのよ。もう濟んだ事だけれど、十吉のその時分の心持はお前には知れなんだのぢやけ、十吉が不憫だと言ひなして、私に、あの……」

「何をくれたの？」

「十さん、もう今ではお母さんを恨んで下さいますまい。あなたが七年前のあの時分に、此處から歸つて行つた私にくださつた手紙を、お祖母さんがすつくり持つてゐなしたのですのよ。まあ母は、それを一々自分が中間で開いて讀んで、此方へ持つて來てお祖母さんに渡したのでしたのよ。……ですからわたしはとうとあの時分に……」

「もうそんな事はどうでもいゝ。それよりも、さういふ母の處でお前さんはどうしてあの時分の……あれかい……」

十吉はさう言ひかけたけれど、さういふ女の怖ろしい罪惡を回顧さすには堪へられなかつた。

「万千さんもう下へ行け。小母が變に思ふといけないから。」と、自分に返つたやうに言つた。

「よ。」

「でも小母さんはまだお歸りになりませぬのよですのよ。あの、法事や何かの相談が氣になるからと言つて、お夜食を早くしなして、石田の伯母さんの處へ出て行きなしたのですけのよ。」と言つたが、間を置いて、

「十さん私しはどうも小母さんが昨夜の事を氣附いてゐなすやうな氣がして心配てなりませぬのい。」と、行き詰つたやうにいふのである。

「何とか言つたから。」

「別にそれとは口へ出して言ひなさらはしませんけど、わたしの氣の曲りばかりでもないやうですけ。」

「い、ぢやないか。」

「でも、そんなに何んでもないやうに言ひなすけど、わたしはあなた……」

「それよりかその昔の手紙を私に見せないか。」と、十吉は、氣にもならないやうに言ふものゝ、何だか二人の喰つ附いた事を小母に知られてはいけないのだと、男の價値に係はるやうな不愉快な心持に押へられる中に、もうこれぎりの戀だといふ、切り別けられるやうな物惜しい心持もするのであつた。

「どんな事が書いてあるだらう。」と、口では矢つ張り手紙の事を言つた。

「わたしは實家へ歸つてから讀むのですのい。それまでは見たくも仕舞つて置きますの

501

「何故。」

「でもあの時實家にゐてやるせなく讀む手紙ですもの。」と、万千子はもうちやんと心を極めて、別れた後の日を見るやうにいふのである。

「それではお前さんは四十九日がすんだら實家へ行つて了ふのかい。」

「えい。」と、寂しい返事をして、

「まあ、わたしは灯を附けないでから。」と、万千子は涙を隠した潤んだ聲で言つて立ちかける。

「待つて万千さん。」

何だかもう今夜ばかりの機會だといふ心持がする。

「こゝへお出てよ。」と此自からの運命に抵抗する事の出来ない、蔭のやうな女を憫ますにはゐられない。

「泣くのかい。」と、十吉は自分も物悲しさうに言つて劬はりつゝ、万千子の戦く手を取つた。

此シーンのために與へられた、かうした暗い夜の中の二人が 吻。——この記憶を自分

はお前の名に結びつけて、終生お前を忘れぬ印に携へて生きるのだ。

「万千さん。」

「私はどこにどうしてゐても、一生あなたを忘れはしませんのい。」と、万千子は、あつと涙を噛んだ。

これが、とうと二人のはかない語らひの最後の機會であつた。

二日ばかりして万千子の母が再び出て来た。父の四十九日が済んだ翌る日に、万千子も母と共に、北の山中へ歸つて行つたのである。

十吉が家を一切賣り渡して、小母と祖母とを伴て、此古い土地を引き上げたのは、まだ薄寒い、早い三月の月であつた。家は表の醬油屋が買つて、すぐに普請を仕直にかゝつた。久しく小鳥の來つゝ馴れた、早さ戀の形見の、あの屋根裏の古巢も、忘れ難い表の家倉と共に壊されて了つた。小鳥はやがて海を渡つて來て、徒らに去年の巢を探して惑うてあらう。——三月といへばもう、燕の群が來るのに間もなかつた。

(終)

大正元年十一月十二日印刷
大正元年十一月十五日發行

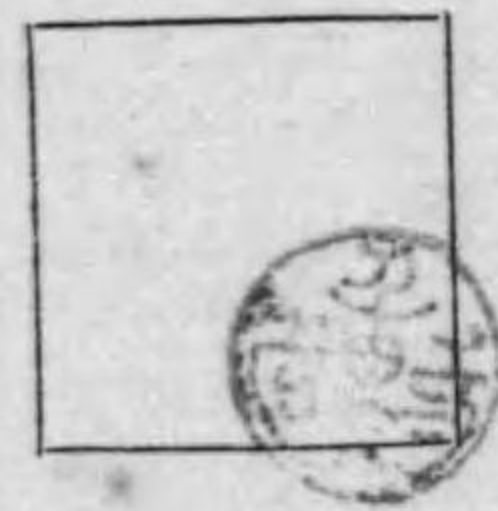
(實價金壹圓廿錢)

著者 鈴木三重吉

發行者 和田靜子

印刷者 石川金太郎

印刷所 株式會社 秀英舍



發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地
(電話本局五二一七番)
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

鈴木三重吉氏著

返らぬ日

第三版

橋木五葉表裝
六判紙入五百餘頁
定價金壹圓
送料八錢

內容編返らぬ日
女帶、小猫、鏡、
民子、黒血、

三重吉氏が近來の名聲を博し得たる傑作六篇を收む。何れも最近文壇を騒がしたる作品なり。

現代文藝叢書第三篇 十二版

女と赤い鳥

實價金貳拾五錢
郵税金四錢

21290

鈴木三重吉氏著

第三版

お三津さん

鈴木清方表装
四六判 帙入二百八
十頁
實價金六拾五錢
(送料八錢)

内 容
お三津さん
久松義久
十字架山
黒髮千鳥彦

本書は著者の「千代紙」時代の傑作全部を收む。その多くは未だ一般讀者の知らざるもの。氏が一字一句に瘦せるばかりの勞苦を刻みたる至純の藝術を見よ。氏自らその後の諸作品よりも純朴なる此等の作を戀すといふ。現在の三重吉氏と氏に集まる讀者とに取りて敢て過故の作品にあらず。

終